

## 【共同研究実践例】

### 1. 研究のねらい

小学部では、昨年までの2年間の研究を通して、個をより良く育てるためには①複数の教官から多くの意見を取り入れ、多面的に個を伸ばしていくこと、②将来社会に出て自立していく子を育てるためには、より大きな集団の中で個が生きることが大切であるということを見出した。

そこで本年度は、学部の子童・教官と一緒に活動できる合同の場を共同で研究できる場としてとらえ、一人ひとりが育てている個を、学部全体の中でも見つめ育てていくことにした。

合同の場を共通の場として研究することのメリットとしては、まず教師の側から見ると、第一に一人ひとりが個別指導やクラス学習の中で育てている個が、集団の中でどのように生きたかということを見つめ、その中から小集団の中では見つからなかった新たな課題や指導法を見つけ出し、次の個別指導やクラス学習のひとつのステップにすることができるという点、第二に普段指導者と研究対象児のみの関係になりやすいものが、合同の場面では、対象児を担当の手から離し、他クラスの先生とかかわりながら、又他クラスの友達とかかわりながら、個がどう育っているかということを見つめられる点あげられる。次に児童の側から見ると、クラス学習が中心でそれ以外の場面ではあまりかかわることがない、能力・年齢等異なる集団の中で、友達と競い合ったり、助け合ったりしながら、集団の中で自分の力を伸ばすことができる点あげられる。

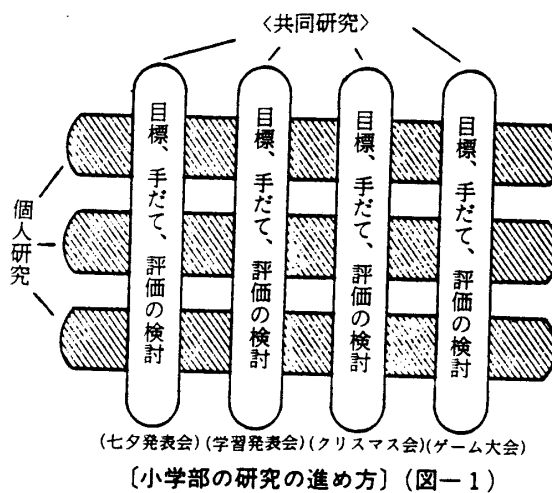
以上のような点をねらいとして研究を進めてきたが、次にその方法、内容等について述べてみたい。

### 2. 研究の方法

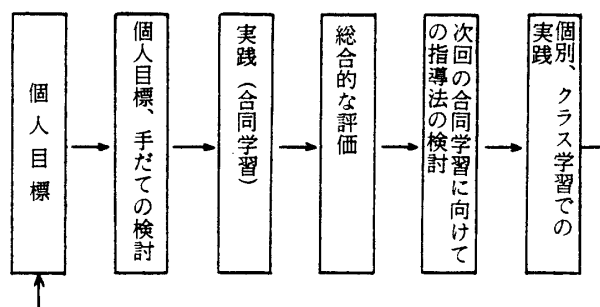
研究の方法としては、まず年間の合同学習の中から、研究を進めていくのに適当と思われる合同学習を4つ選び出した。具体的には、①たなばた発表会②学習発表会③クリスマス会④ゲームたいかいである。この4つの合同学習を選んだ主な理由としては、どの学習も子供たちが楽しみにしている年間の大きな行事にかかわっていること、

どの学習にも製作、活動(出し物、ゲーム)が含まれており、年間を通した児童の変容がとらえやすいこと等あげられる。

合同学習が決まると次に、合同学習に入る前に、それぞれが研究を進めている研究対象児の個人目標をもとに、その子らしさを出すためにその学習でどのような活動をさせたいか話し合い、教官全員で対象児一人ひとりの、個人目標、手だてについて検討し、学習に取り組んだ。そして単元の



終わりに一人ひとりの総合的な評価を行い、それをもとに、次の合同学習に入るまでの指導法を話し合い、各研究者が、個別、クラス学習において実践し、また次の合同学習に向かうという方法で研究を進めた。図2に示したものが研究の大まかな流れである。また、個人目標、手だて、評価の検討においては、図3に示すような評価表を利用して話し合いの資料とし、記録を残していくようにした。



〔研究の流れ〕(図-2)

このように本年度の小学部の研究は、一人ひとりが研究仮説に基づいて個別やクラス学習で実践していることが、その子にとって最も良い指導法であるか、その子が本当に目標に向かって伸びてきているかについて、複数の目で評価、検討し合い、一人では見落としがちな点を補いながら、個を育てていこうとするものである。

	個人目標	手だて	様子	評価
氏名	※その学習で望む姿	※グループ分け補助の仕方 教材の配慮等	※技能的な面 態度的な面	A…目標達成 B…ほぼ目標 C…目標以下

〔合同学習評価表〕(図-3)

次に具体例を述べてみたい。

### 3. Y子の実践例

Y子は、新学期に入って、担任や友達それに教室などの変化による不安定さも加わって、つまづきがあると、しゃがみこむ・うつぶせるという“おちこみ、をよく見せたが、指導方針の変更から急ピッチで変容を見せていった。(P23～P27参照)

Y子のおちこみに対する指導は、自分より能力の高い他のクラスの児童や教師集団との関りが持て、担任から自立して活動する場が持てるという点で、合同学習を指導の場とするのに適した時期であると言えた。以下、3つの合同学習において、Y子の目標・指導・評価・課題を教師集団が検討していた経過を述べてみたい。

なお、例示した評価表は、特におちこみに関する課題に絞っている。

#### (1) 七夕発表会——かざり作り(わつなぎグループ)

Y子に試行的指導を続け、変容から見られつつある時期(P25参照)、七夕発表会の合同学習では、かざり作りに取り組んだ。クラスよりも刺激や抵抗のある合同の場において、Y子のつまづきがどう現れるか、合同学習を実態をとらえ、次の学習への課題設定の場として臨んだ。

クラスでは、能力的に1番はほぼY子で安定している。が、合同では、U君というY子より能力の高い子に出会い、1番になれないのでおちこむのではないか?という点に視点を置いた。

目 標	評 価 (様 子)	記
<ul style="list-style-type: none"> <li>・U君の方が長くても、おちこんだり、すねたりしない。</li> <li>・先生が他の子を援助したり、関心を持って、すねたり、ふてたりしない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・U君が圧倒的に長く、気にはしていたが、すねることはなく、マイペースで取組んだ。皆の前の発表が恥ずかしく援助された。(1回目)</li> <li>・U君の方で調子が悪く不在。Kちゃんと「つなごう」と言って協力していた。先生の関心が<math>\frac{1}{2}</math>になっても影響なかった。</li> </ul>	A A

考察 (話し合いの中から～)

- U君がどんどん長く作るのを気にはしたが、側で担任Sが色の違いを評価したり、Y子の取り組み態度を評価したりしたのでおちこみにはならなかったと考える。2回目はつき放しを試みた。U君のハプニングのため条件は違うが意欲的なY子だった。Kとの関りも良かった。
- 合同の雰囲気の効果、好きなわつなぎの効果もあったと考えられる。次からは、担任のグループから自立する、担任外の先生の指示もきくという合同ならではの指導が可能である。

(2) 学習発表会——劇練習、道具作り

七夕から2か月経た合同学習である。クラスでは、ふてたりすねたりしても大きなおちこみはなくなってきている。担任が注意すれば態度を改め、援助されながら言葉の表現をしつつある。(P25参照)「さるとかに」のかに役に意欲的なY子であった。どの先生の指示でもきき、困った言葉で表現するというところに視点を置く。

目 標	手 立 て	様 子	評
<ul style="list-style-type: none"> <li>・担任外の先生のやり直しの指示に、すねたりせず従う</li> <li>・失敗したり、セリフを忘れたら「わすれた」等伝える。教えてもらって頑張る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・すぐにできたら誉めて、次への意欲へつなぐ。</li> <li>・間を置いて待つ→促す声かけをする→代弁して援助する→厳しく促す。の手順をとる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大きな身ぶりや視線を注意されたり、やり直しの指示をされたが、すぐ指示通りやっていた。</li> <li>・声には出して言わなかった。目くばせで忘れたことを訴えた。教師の方が言葉を促すことを忘れ反省。教えてもらったらずぐ演技を続けた。</li> </ul>	A A

考察 (話し合いの中から～)

- 担任外の先生の指示にもよく従い、意欲的であった。困ることがほとんどなく、言葉の表現の機会もなかった。
- さる役のU君に親しみをもちだした。この関心を交友の方向にもっていきたい→クリスマス会へ課題 ←
- クラス学習で、お話をきいたり、楽しみを膨らませたりしたのは、全体練習の意欲づけとなった。教材の<sup>あ</sup>た<sup>た</sup>めはY子にとって重要で配慮すべき事。クラス学習と合同の関り方を学ぶ。
- いい子になりすぎて、元気がなくなったような心配を持つ。あまりに早く問題がなくなりすぎることの弊害が後々出てこないか？(前担任)→我慢の指導ではない。自己表現による困難克服の指導であることを再確認する。

(3) クリスマス会——かざり作り (わつなぎグループ)

前担任のT先生のグループに入り、自立を促す。T先生やU君との関りに視点を当てる。

目 標	手 立 て	様 子	評
<ul style="list-style-type: none"> <li>・他クラスの先生の指導を受けたり他クラスの子と関る</li> <li>・つまづきを内に込めないで言葉で表現し、解決する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・T先生に会話をたくさんもってもらおう。U君との関りを促す指示をしてもらおう。</li> <li>・学習発表会に同じ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・T先生の声かけによく乗っていた。担任から離れた淋しさも見せたが、作業に熱中していった。</li> <li>・U君の方からY子を手伝い、協力して一本のものに取り組むことが2回とも見られた。</li> </ul>	<p>A</p> <p>A</p>

考察（話し合いの中から～）

- T先生が前担任であったので指導もスムーズだったと考えられる。担任→前担任→未担任と徐々にステップをふむことがY子にとって望ましい。次回は未担任グループへ。
- U君と仲間、協力者の接し方が見られた。次回も期待



#### (4) 実践をふりかえって

Y子のおちこみを合同学習に照らし合せ、最も指導効果のありそうな場面に視点を当て、取り組みを繰り返した。目標・評価の検討を繰り返したことによって、U君との関りは、クラスを越えた友達関係に発展しつつあるし、合同における指導者は、担任→前担任→未担任とY子にとって無理のないステップをふむことができた。一方、小学部7人の教師が多角的にY子を見つめたことは、指導の行きすぎを防ぎ、反省を促した。このような多角的な見方、共通理解による総合的な指導は、Y子の成長の巾を広げるものだったと言える。今後もこのような取り組みでY子の成長を促したい。

## 4. ま と め

本年度小学部では、昨年の個人研究中心の研究手法から、研究のシステムを一步向上させ、一人ひとりが育てている個を全教官で共通理解し、その指導法や評価について話し合い、多くの意見を取り入れクラス学習にもどしながら指導していったという点では、一応の成果を見る事ができた。又合同学習を通して伸ばしていくことが大切な児童にとっては、有意義なものではなかったかと考える。

しかし、研究の中心は、一教官一事例研究であること、他の対象児とのかかわりが、この研究で取り上げた4つの合同学習、合体、合音以外ではあまりなく、その子供の実態や、合同学習に入るまでに育ってきた経過等が細かく把握できず、具体的な意見や助言がなかなか出しにくかった点や、評価の基準や子供のとらえ方が人によって違う点が問題点として残った。又評価についての基準をもっと明確にしてクラスや合同の中に生かしていくことも今後の課題として残された。

小学部では、これからも個別、クラス、合同の学習形体で指導していきながら、今回の共同研究での成果や反省を生かし、集団の中で個をしっかり見つめながら育てていきたいと考える。